

シャープ/スマホ新機能「emopa」(エモパー)

高い技術と鋭い狙いが切り開く
受動型スマホの可能性

スマホがタイミングよく話しかけてくるというシャープ「emopa」(エモパー)は、一見すると電子機器の擬人化系サービスであり、過去に本コーナーでも紹介した「ともだち家電」(2014年7月号掲載)の延長線上にあるようにうつる。が、実際には極めて高度なテクノロジーと意義深いコンセプトが込められており、スマホの新たな存在価値を示す可能性を秘めた端末に仕上がっている。

「emopa」とは「エモーショナルパートナー」の略。直訳すると「感情的な相棒」だが、機能やコンセプトを踏まえてやや意識するならば「自らの意思と感情を持ってユーザに接してくるスマホ」といったところだろうか。

要は「おはよう」「お帰り」「お休み」などの挨拶を適宜発してきたり、当日の天気やイベント情報などを教えてくれたりするわけだが、これらを自発的に、かつタイミング良く行ってくる点がポイントとなる。

従来、こうした機能を伴う端末とのコミュニケーションは、ユーザからの直接的接触に対するリアクションとして設定されるのが一般的。しかし、「emopa」はあくまで自発的に、むしろスマホからユーザにアクションを仕掛けてくる。

そして「タイミング」。あれこれ構わず四六時中スマホに話し掛けられているのは、愛でる気持ちを通り越してイラついてしまうのは人の常。それを踏まえた上で、空気を読みつつ話し掛けてくるのも「emopa」の特徴だ。ちなみに声で話し掛けてくるのは自宅の中だけで、外にいるときは会話が画面上に出る形となる。

これらの機能がユーザ側の事前設定に基づいて反応するならばさほど驚きもないが、そもそも「emopa」には「設定」の概念がない。あるのはせいぜい個人的な3人(えもこ、さくお、つぶた)の中から選ぶという程度のことで、起床時間や就寝時間、自宅の場所や職場の場所、移動の手段や状況などを判定しているのはシャープ独自のセンシング技術(スマートセンシング)による

ものだ。

音声も決められた吹き込みではなく合成であり、ユーザの状況を踏まえて適切な内容を振ってくる。さらにクラウドなど大規模なサーバを後ろ盾とせず本体処理を基本としており、センシングで取得した各種情報は他のアプリでも活用されないなど、徹底したプライバシー保護の体制が敷かれている。

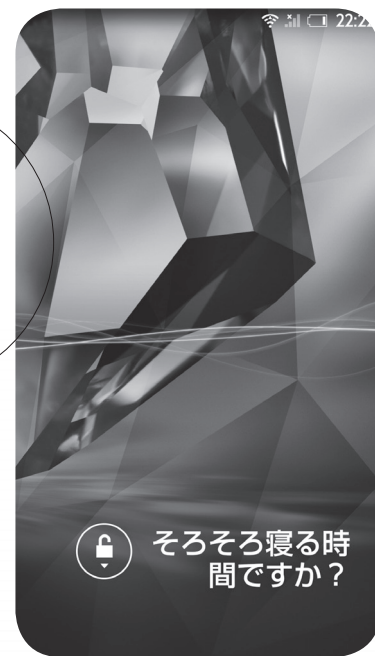
受動的だからこそ許される
あいまいさ

「目指したのは、ユーザが受動的に接することができるスマホ」(通信システム事業本部マーケティングセンター新規ビジネス戦略推進部長・小林繁氏)。高機能化が進む中、それでもユーザが能動的に操作しなければ意味を持たない存在であるスマホにおいて、新たなアプローチを提示したことになる。

ユニークなのは、ユーザ受動を目指した結果として「ゆるさ、あいまいさ」という本来のスマホに求められる役割とは真逆の特徴が生まれていること。自ら電車の時刻表を調べようとした際に「ゆるくてあいまい」な結果を出されたらたまったものではないが、「今日は天気が良いから出掛けておいでよ」と呼び掛けられる分にはさして気にならない、というわけだ。

これをビジネス目線に落とし込むと「可処分時間の拡大」につながる。「emopaとの受動的なやり取りは、現状5~6時間といわれるスマ

シャープ「emopa」。
折をみてスマホが「声」
または「画面」でユーザ
に話かけてくる



ホの接触時間を侵食するものではなく、それ以外の時間を使ってユーザに新たな気づきを与えるものになる」(小林氏)。

画面にキャラアイコンなどを登場させず、あくまでスマホそのものがキャラクターである、という概念も面白い。「ユーザの関心はアプリやネットワークの先にある、スマホ自体は窓口のようにとらえられがち。端末自体が持つ魅力を感じてほしかった」(同)との狙いがあるそうで、この設定があるからこそ、端末を落としたときに「痛いよ」と怒られるなどのギミックが効いているように思う。

「emopa」とのやり取りによって複雑な操作を簡単に行える、といった機能性はない。が、端末に対する愛情に似た不思議な感情が湧き、また従来のスマホにはないさまざまな気づきを与えてくれる。この「癒し系」とでもいうべきスマホが今後、どのような進化を遂げていくのか。まずは案外、高齢者へのスマホ普及に一役買うのではないかと予想しておく。